緑ネット通信 No.35

緑のネットワーク・まつど
代表：川上将夫
年会費：1000 円
連絡先：高橋盛男 047-367-2857
渋谷孝子 04-7153-5392

都市の緑を残すためには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動のテーマは、みどり特に樹林の保護･保全を願う人やグループと連携しその輪を広げ，豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

里やま保全活動ネットワークが景観大賞　受賞！

藤田　隆

1 月 14 日（土）午後、松戸市民劇場で第一回松戸市景観賞を表彰する式典が開かれた。会場には 100 人を超える関係者・市民が集まり、表彰式に臨んだ本郷谷健次松戸市長は「景観条例が平成 23 年 6 月に施行された。東京から近い松戸市を魅力あるものにし、若い世代に集まってもらうため、景観条例の果たす役割は大きい。今年を景観元年としたい」との考えを示した。

松戸市景観担当室は表彰にあたり、魅力ある松戸の景観を整備するため、景観づくりに寄与している建物、活動を表彰し、市内外に広く紹介すると説明した。

松戸市景観賞は大賞、優秀賞、景観賞の３ランクで、建築部門と活動部門のそれぞれが表彰されたが、活動部門では「里やま保全活動ネットワーク」が大賞を受賞した。（ほかに大賞建築部門は「流通経済大学松戸キャパス」。優秀賞は建築部門「セブンタウン常盤平店」、活動部門「根木内歴史公園サポーター『根っ子の会』。景観賞は建築部門「レクセルプラッツア新八柱」、活動部門「景観色彩を考える会・まつど『１１１６（いい色）の会』」「聖徳大学『水とみどりと歴史の回廊マップ』制作活動」「稔台街づくり研究会」）

写真上：左より、榎本氏（松戸まちづくり交流室）、川上氏（緑のネットワーク・まつど）、佐竹氏（里やま応援団一起の会）、島村氏（松戸市みどりと花の課）。　写真左：大賞のクリスタル盾

松戸市の里やま保全活動は、里やまボランティア入門講座の修了者が結成し活動している里やま応援団グループの各会、「関さんの森を育む会」、「根っ子の会」などの市民活動団体、松戸まちづくり交流室（通称テント小屋）、山林所有者、大学、行政がネットワークを形成し行っている。こうした都市樹林保全の全体的な仕組みが高く評価された。

大賞の栄誉に輝いた「里やま保全活動ネットワーク」の関連団体「緑のネットワーク・まつど」の川上将夫代表は、「一つ一つの積み重ねが表彰に結びついた」と受賞の喜びを語った。

特集　松戸まちづくり交流室（テント小屋）

（インタビュー　川上　2012/1/26）

上記ネットワークの一員である「テント小屋」は、市民活動をサポートするとともに、必要に応じて地域や市民団体と行政等との橋渡しなども行う中間支援団体である。財団法人松戸市都市整備公社が 1999 年に設置した。公社からの補助を受け、まちづくり・地域づくり活動を行っている。里やま保全活動に関わる事業に「緑の担い手育成事業」があり、「里やま講座プロジェクト」、「根木内歴史公園プロジェクト」、「戸定が丘みどりの回廊プロジェクト」に取り組んでいる。活動を支えるテント小屋を主宰する榎本孝芳氏に今回の受賞について聞いた。

Q テント小屋は今回受賞の活動に大きくかかわっておりますが、座長である榎本さんの感想を？

A 十数年間にわたる市民の自主的な活動が評価され、大変うれしく思っています。これまで「財団法人松戸市都市整備公社」より、施設の利用や財政面でご支援をいただき、心より感謝しております。公社から支援をうけながらも活動の自由度は大きかったことが、今回のようなよい結果を生んだと思います。

Q これからの抱負や課題について

A これからは行政からの支援がなくとも自立できる力が、市民団体に必要とされています。長期的な活動を可能にするしっかりとした財政的基盤を作るため、NPO 法人化を目指します。

緑の担い手を養成する「里やまボランティア入門講座」を松戸市や緑関連グループと連携し９年間実施してきました。いまや百数十名の修了生が巣立ち、市内各所で精力的に活動しています。テント小屋にとっては大きな成功事例です。私たちは里やま保全活動のほか、いろいろなまちづくり事業に取り組んでいます。「里やま講座」で得たノウハウを他の分野でも生かしつつ、“すてきな松戸を未来に遺す”ため、息の長い活動をつづけていきます。

関さんの森
『親ケンポナシ』が
無事に移動しましたよ！！

文:吉田 堯、写真:岡本 博

かつては成人の日であった１月 15 日の日曜日。お天気にも恵まれ、幸谷地区の「関さんの森」は…何だかお祭りのような賑わいでした。

いまでは大変珍しい「立曳き工法」で樹木を移動させるという前宣伝が効いていたせいか…受付が始まる 9 時過ぎには早くも数十人の人が押しかけ、「開会式 」が始まる頃には 200 人近かったでしょうか。

幹回り 2m以上、樹高 10m以上、樹齢 200 年以上ともいわれる「親ケンポナシ」を 16m移動させる日なのである。松戸都市計画道路の迂回道路用地の中にあるため、道路の外に移植を行う必要があったのですね。

ケンポナシは･･･梨と同じバラ科？ではない。クロウメモドキ科に属する。初めて聞いたが、実は食べることもできる。受付で配布していました。乾燥した実の外観は黒っぽく、あまり美味しそうには見えないのだが、食べてみるとコクのある味がする。

開会式では、関美智子さんから、この日を感慨深く迎えた想いの伝わるご挨拶がなされた。

2 本あったケンポナシ。そのうちの小さなケンポナシの移植は昨年のうちに終わったが、今回の「親ケンポナシ」の移植は大変な準備だったようですね。

これらの作業を請負ったのが富士植木さんでした。嘉永２年の創業という。160 年余り前の創業なのです。ペリー来航の数年前という。同社の社長にお話を伺ったら、本社は千代田区にある…実は私も勤務先が九段北にあったと言うと…社長は麹町郵便局の裏手、九段南にあるのだとおっしゃる…驚きました。郵便局は歩 いて 2～3 分のところにあった。

「親ケンポナシ」は、落雷などのため樹木がかなり傷んでいました。クレーンで持ち上げてというわけにはいかないのですね。そこで採用されたのが「立曳き工法」というわけです。木を立てたままの姿で、コロなどを使い人力で移動させる。日本古来の移動方法で、樹木にとって負担が少ない方法とされていますが、高度な技術を要し多額の経費もかかるらしい。

この準備に着手したのが 2 年前。最初に半分の根回しを行い、細かい根が出るのを待ち、翌年には残りの半分を行うという気の長い話です。枝を落とし、根元の土が崩れないようコモと縄でしっかり「根鉢」を作る。根鉢の下にはミチイタやコロを差込み、最後には底の部分を地面から切り取って台の上に乗せる。

乗せると簡単にいうが、根っこ部分も含めて総重量は 40 トンは下らないというのだから大変なものです。

これらの準備が終わったら、移動のための目標地点までの溝を掘る。幅 8m、深さ 2.5m、長さ 16m。掘った土の量は少なくとも大型トラック 50 台分以上はあるのだそうだ。傍に山のように盛り上げてあった土がそれであった。

移動は…根鉢に取り付けたワイヤを神楽桟（カグラサン）と呼ばれる引き出し用具で巻き取っていくようにして引っ張る。入社歴 10 数年という富士植木の社員の方でも、この種の工法は経験がないと言う。

この巻取り作業に参加できるのが、早朝から駆けつけ受付を済ませた 50 人余りの皆さんである。大人も子供も嬉しそうでした。私たち取材班も参加しました。根鉢を倒してはいけないと注意されていたから、皆さん、面白がりながらも心棒を緊張した様子で回していました。しかし、この巨大な根鉢は動いているのかいないのか…ごくごく僅かずつ動いている。30 分過ぎたころでも 1m も動いていない…今日中には終わらないのかと思ったが…16m先の目標地点にたどり着いたのは 5 時間後の 3 時前。皆さんから大きな拍手が沸きあがりました。

これで…後は埋め戻すだけかと思ったが、実際どうなるのかと思い、翌日、再び現場に行って見ました。お祭りの後の静けさでしょうか・・観客はもう誰もおりませんでしたが、話はそう簡単ではなかったのですね。根鉢の下の台等を撤去しなくてはいけないのですが、総重量が 40 トンもの巨大な根鉢の扱いは容易ではありません。

作業員の皆さんが、土嚢をせっせと作っていました。埋め戻し用に土嚢を作っているのか？何故土嚢を？と思ったが、そうではないのですね。根鉢を乗せている台を

いきなり取り除くわけにはいかない。バランスを崩す恐れがあるからです。隙間に丁寧に土嚢を詰め込み始めたのです。この土嚢詰め込み作業は、結局、次の日の午後にようやく終わりました。

お話を伺ったら…埋め戻し作業には 10 日間ほどを要するという。

埋め戻し作業が終われば…根付くのを待つだけ。粘土状の土質のため保水性が良いので根付きもいいだろうということです。

ご苦労された皆さん、お疲れ様でした、本当におめでとうございました。

再発見ツアー16(「オープンフォレスト in 松戸」協賛企画)
常盤平～千駄堀　初冬の森を巡る

川上　将夫

快晴、風もほとんどなく絶好の観察会日和となった。 数日前まで雨が続いたせいか、今日は参加者の表情も明るい。参加者総数71名。 寒さもなんのその、盛況であった。

常盤平駅そばのひまわり公園で今日の予定などをまず説明し、早速スタート。　最初の訪問地は「常盤平北部緑地」。

ここは地権者より松戸市が借り上げて公園として開放しており、クヌギやイヌシデ、スギなどからなる混成林。

←常盤平北部緑地

次は「ホダシの森」へ。 里やまボランティア「四季の会(よんきのかい)」が、地権者の了解を得て保全活動をしている。森の広さは 0.5ha と広くはないが、美しいイヌシデやササの竹やぶが広がっていて、やさしい感じのする森。 また地主さんが植えたという桜もあり、ちょうどジュウガツザクラが咲いていた。 落ち葉を踏みしめて歩くととても気持ちが和む。 代表の中島さんから「森備作業は一段落し、皆さんゆっくりペースで活動しています」とお話があった。

ホダシの森

隣にはグループホーム「ひなたぼっこ」があるが、いま交流を深めているところ。 入所者を森に招待すると、次はホームのもちつき大会に呼ばれるというように、この森は絆を深める場となっている。 まさしく森は人をいやし、そしてつなぐ。

「ホダシの森」の次は「八ヶ崎の森」へ。 里やまボランティアの草分けである「一起の会」が保全活動を行っている。 代表の佐竹さんや会員の方から、この森が抱える課題やこれからの取り組みについて次の様なお話があった。

1. 地権者が複数名おり、中心部分は所有者の同意が得られないため、手つかずのままの状態。
2. 南側部分は最近宗教法人に売却された。
3. 隣接マンションより木の剪定・伐採を依頼されたが、地権者と業者間のコミュニケーションの行き違いにより、過剰な伐採が行われ隣接部ははだか同然の森となった。
4. 伐採はほんとうにショックでみな呆然となった。しかし何とか森を再生したいという強い思いで話し合いを始めた。大量に伐採された木をまず整理し、樹木を定期的に植え、以前はなかった花が咲く木や低木も植えたりする計画をたてた。
5. 2010 年 9 月に第一回植樹祭を行うところまでこぎつけ、2011 年にも第二回目を行った。ひたすら汗をかく作業の連続であったが、何とかここまでこれた。

お話の後全員で植樹が行われた斜面を見学。 植樹された木々はほとんどが順調に生育しつつあるのを見て「よかったね。 生命力あるねー」という声が聞かれた。 再生事業はまだ始まったばかりであるが、数年後、十数年後には、きっと立派な森になるに違いない。 立ちはだかる困難にもめげず、粘り強い活動を続ける「一起の会」に改めて敬意を表したい。

八ケ崎の森

最後に、観察会の後午後に行われた振返り・学習会(21 世紀の森と広場アウトドアセンター)やアンケートで参加者から出た声を、いくつか以下に紹介する。

〈一番印象に残ったこと、考えたことなど〉

- 民有林をボランティアが守っていること、その負けない根性に敬服

こまだこんなに緑が残っていることに驚いた
- ホタンの森は安らぎの森、八ヶ崎は3年後が楽しみ
- 保存活動に市からの資金援助や、森の公有化はできないか

森へ行こう！
オープンフォレスト in 松戸

野口 功

昨年、東日本大震災、福島原発事故で 1 年延期となった「第 1 回オープンフォレスト in 松戸」。今年こそ盛大にやろうと、元気に準備が進んでいます。

5 月 12 日（土）午前 10 時から、21 世紀の森と広場パークセンター シアターホールでのオープニング式典でスタート。翌 13 日は、市民ボランティアが里やま保全活動をしている 14 か所の森を一斉に公開し、20 日までの間、各森毎に日を決めて公開します。それぞれの森で、自然観察や作業・工作体験、ブランコやハンモック、森林セラピーなど、市民や子どもたちを迎える多彩な取り組みが計画されています。

その他、6 コースの森めぐりツァーも企画。またパークセンター2 階では、期間中、里やま保全活動を紹介するパネルや森の絵画や写真、竹工作、チェーンソーカービング作品などを展示する「森の文化祭」も開かれます。

ぜひ、身近な森を訪れて、その姿を感じてください。（各森の公開日や森めぐりツァーの日程は、実行委員会のチラシを見てください）

緑ネットメーリングリスト参加へのお誘い

緑ネットでは、会員相互の連絡や情報交流にメーリングリスト（ＭＬ）を利用しています。メーリングリストは、定められたアドレスにメールを送ると、登録された全員に同じメールが配信されるシステムです。

緑ネットの会員で緑ネットＭＬへの登録をご希望の方は、下記のアドレスへお申し込みください。

forest-t@w2.dion.ne.jp（高橋）

～しぜんのコラム17～

フキは雌雄異株？

早春の山菜といえば、フキノトウ。こどもの頃は苦手であったが、50 歳を越えるとほろ苦さがたまらない。植物が苦味をもつ理由は、動物に食べられないようにするため。フキもピロリジジンアルカロイドという毒性のある物質を持つが、ヒトはこれを“灰汁抜き”によって無毒化して食べている。灰汁抜きを知らない（できない）他の動物はフキを食べないから、フキは牧草地などでは雑草扱いだ。

ところでフキはキク科の植物で“雌雄異株”とされている。たとえば下の写真は雌株のフキノトウ。拡大写真を示せないのが残念だが、頭花を分解すると、多数の雌花の他に、少数だが両性花もある。これはどういうこと？

雌株のフキノトウ（2008.3.16 関さんの森）

そのあたりの事情は、多田多恵子著『したたかな植物たち』の「フキノトウの男女交際」に詳しい。フキの雌花は花粉や蜜を出さないが、それでは虫が来ない。そこで、ダミーの両性花（機能的には中性）をもぐりこませ、多量の蜜を出して虫をおびきよせているとのこと。

フキは虫媒花。したたかな作戦で虫を呼び、花粉を運ばせているのである。

（山田純稔）

「オープンフォレスト in 松戸」協賛企画

★松戸のみどり　再発見ツアー⑪　（緑のネットワーク・まつど主催　観察学習会 37）

「松戸の宝・矢切の斜面林を巡る」

東京から江戸川を渡ると目に入ってくる豊かな緑の帯、まさに松戸の宝です。
その斜面林を外から、中から巡り、緑について考えます。

３月１１日（日）　９：３０～１４：３０　（現地解散・小雨決行）　**参加費３００円**（会員は 100 円）
集合　北総線　矢切駅　改札口　９：30 集合　　**持ち物**　弁当、飲み物、雨具
問い合せ 090－2935－9444（高橋）　※終了後に定例会をいたします。ご参加ください。

緑ネット通信 No.36

緑のネットワーク・まつど
代表：川上将夫
年会費：1000 円
連絡先：高橋盛男 090- 2935- 9444
渋谷孝子 04-7153-5392

都市の緑を残すためには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動のテーマは、みどり特に樹林の保護･保全を願う人やグループと連携しその輪を広げ，豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

大成功！！　オープンフォレスト in 松戸

「第１回　オープンフォレスト in 松戸」が 5 月 12 日～20 日に開催されました。ボランティアが活躍している森を一斉公開するこのイベント。初日、21 世紀と森の広場パークセンターでのオープニングセレモニーは、本郷谷健二市長が駆けつけてくださったほか、森の公開に協力していただいた所有者の皆様に主催者から感謝状を贈呈するなど、日ごろの活動でお世話になっている方々に謝意を伝えることもできました。期間中に森を訪れたり、森めぐりツアーなどに参加された方は約 2000 人。震災の影響で一年待っての開催でしたが、初の「オープンフォレスト」は大成功をおさめました。

小さなお客さんも･･･

森は市民でおおにぎわい

グループホームの皆さんも･･･

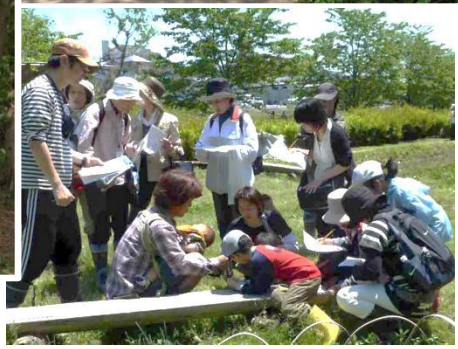
森の所有者さんへ感謝状の贈呈

手作り紙芝居は大好評

関さんの森も いつも通りにオープン

「森の文化祭」では、活動紹介の他、きれいなもの、楽しいもの、さまざまな作品が並びました。

ハンモックは年齢問わず「きもちい～」



根木内歴史公園では観察会を実施

参加した方にアンケートに答えていただきました。「保全のために努力している人がいることがよくわかった。応援したいし自分も参加したい。」「計画大変でしょうが次回楽しみにしています。」などのうれしい声もきかれました。

張り巡らされたロープで遊ぶ

丸太切りは大人気　ひとりで丸太を切り落とすまで頑張る姿に感動しました

ご案内のあいまに、整備活動に汗を流した森も

一昨年に企画され、昨年５月に開催を予定していたものの震災の影響により一年延期して実現した「オープンフォレスト in 松戸」。期間中は 14 カ所の森（公園を含む）が公開され、６コースを設定した「森めぐりツアー」や、パネルや映像、森の工作物などの展示で松戸の里やま活動を紹介する「森の文化祭」も滞りなく開催されました。多くの来訪者を迎え入れた松戸の森も、そのにぎわいをきっと喜んでくれたことでしょう。

オープンガーデンの森版「オープンフォレスト」。これほどの数の都市の森が連携し、一斉公開されるのはおそらく全国で初の試みです。その実現は、いわゆる「緑の市民力」の賜物であると思います。

公開に賛同してくださった森の所有者の皆さん、その森の手入れ活動や、都市の緑の大切さを伝える活動に汗を流すことを惜しまない里やまボランティア団体、そして行政や関係機関による強力なバックアップ。さまざまな「緑の担い手」が手を携え、ひとつのテーブルを囲んで話し合い、企画や準備、資金の調達までも自前で行ったことは、このイベントの大きな成果といえます。「オープンフォレスト」の開催に尽力した実行委員会に賞賛の拍手を贈ります。

オープンフォレスト in 松戸
森めぐりツアー「高塚・秋山コース」

鈴木　護

5 月 20 日（日）「森めぐりツアー 高塚・秋山コース」の案内は緑のネットワーク・まつどが担当でした。

9 時 30 分東松戸駅集合でしたが、40 分ほど前から参加者が集まり始め、定刻を待たずに 80 人を超え、スタッフや市役所の方たちが加わり大所帯になった。行程など説明後 2 班に分かれて出発した。

駅を出てしばらくは武蔵野線の線路を右側に見下ろしつつ歩く。左側には森が広がっているのだが、こちらは所有者の都合もあり遠く眺めるだけ。

梨街道（国道 464 号線）の道路横断には気を遣い、流れている車両にしばらく止まってもらい横断歩道を安全に横断する。

約 20 分ほどで小浜屋敷の森に到着。2009 年から 12 名で森の整備活動をされてきたとのこと、マダケ、アオキ、シュロなどを減らしたり下草刈りをすることからはじめたそうだ。

長く放置されていたこともあり、大きな木も上へ上へと伸びたために多くが同じような上の方で傘を広げたような樹形になっている。樹種はムクノキ、エノキ、ケヤキ、イヌシデ、イヌザクラなどが多い。特にシロダモの若葉はビロードのようで、手で触れて楽しむことが出来た。

枝葉が伸びて畑の陽当たりが悪いという近在の苦情もあるが、森が明るくなり沿道も植栽で綺麗になったと喜ばれているとおっしゃっていた。また、展示していた間伐材を利用した木工・竹細工品などに感心した。

次に高塚八幡神社まで歩く。その参道脇の緑地は「里やま応援団」が入って作業している森だと聞く。日差しがぐっと強くなった住宅地を歩き、本日の最終目的地である秋山の森に向かう。

森に近づくとクヌギの大木が目に飛び込んできた。そして秋山の森に到着。木陰に入るとその涼しさに感激した。こちらの整備も「里やま応援団」が共同でされているとのことである。

ガイドの方のお話では周辺の住宅との枯れ葉や枯れ枝等の問題点、森に手を入れていくことへの苦労などを聞く。

最初の作業はトラック 3 台分のごみの収集から始まったという。内部に分け入るとかなりの広さ（約 1ha）でクヌギやサクラも多いが、何より孟宗竹とマダケが時節柄目に付く。そしてこの森を住処としているのかカラスアゲハとアオスジアゲハが優美に飛び回る。

窪地になったところの池ではヒキガエルのおたまじゃくしに遭遇しホッとした。

参加者には初めての方もいたし、他のツアーコースに参加された方も多くいた。

この日にもっと他を回ろうという元気な方もいた。緑の環境や松戸に点在する森に市民の関心は高い。

トトロがいるかもしれない！？
「石みやの森」

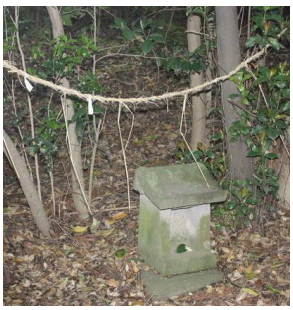
文:吉田 堯、写真:岡本 博

「紙敷 石みやの森」に伺おうという日の前日は一日中の雨降り、明日は大丈夫なのかしら…大分心配させられましたが、当日は文句のつけようのない上々の好天に恵まれました。

この日の「石みやの森」は「オープンフォレスト」のツアー日にもなっていて、最寄りの武蔵野線・東松戸駅の改札口を出ると、既に 50 人以上の皆さんが集結されていた。いやいや思った以上の大変な盛況だと…横目に見ながら森に向かいました。

市立松戸高校のグラウンドに沿っていくと…程なくして「森」に着いた。その反対側は地下に潜った北総鉄道の線路を境界とした 1ha 程の広さであるが、まず入り口の“看板”の立派さには驚かされましたね。2m ほどの高さの木組みに数㎝もの分厚い横板が打ち付けられ、「紙敷石みやの森　七喜の会」という文字が深く鮮やかに刻まれている。6 期の佐藤さんなどの労作なのだという。

「石みやの森」取材の話があったとき、何ともクラシックな？名称が気になっていたのですが、入り口から森に入って直ぐのところの 2 本のスダジイの巨木の足元に、小さな石の祠が鎮座している。これが森の名前の由来なのですね。祠には延宝 4 年（1676 年）の作と刻まれていると教わった。千葉県内では一二を争う古いものだそうです。隣接したところに



お住まいの地主の方も大切にお守りされてこられたそうで、「七喜の会」の皆さんも、これを受け継ぎ「森」をそのように命名されたのだという。

みんなで祠でお参りをすませ…時計回りのように、さらに森に入っていく。

丸太などで組んだ立派な「応接間」のような、ポッカリとした明るい空間が広がっている。ウグイスカグラの広場と称している。ウグイスカグラは鶯が鳴くころに咲き６月頃に赤い実をつけるのだというが、ウグイスカグラの木を三角形に組んだ奥座敷？のような休息所である。皆さん、作業の合間にはここで歓談されている。

この広場が森の中で…一番の低地にあたる部分のようです。ここだけが頭のほうがポッカリと空いていて、明るい日差しが降りそそいでいる。会の皆さんのご苦労の証でもある。

傍の木には作業用の長梯子が鎖でくくりつけられ施錠されていた。収納する場所がないのである。小屋でも作りたいが…市からいただいている助成金は資産的なものには使えない。どうも使い勝手がいま一つと感じているようです…ね。

広場を出ると、急な上り坂になる。歩きやすく階段が作られている。起伏がかなりある。恐らく 10m以上の高低差があるのでは…その起伏が森に実際以上の厚みを与えている。上りきったところには、お祭りだからというので木にハンモックが吊るしてあった。整備を始めた頃には、その木の近くには巨大な蜂の巣があって、市の「すぐやる課」に除去をお願いしたこともあった。さすが「すぐやる課」、すぐきてくれたそうです。

丘陵になっているところから…下っていく。思わず来し方を見上げてしまう。

さらに、土手のような土を盛り上げたような部分が目に入った。これは？…享保年間の初めに築かれた「野馬除け土手」というのだそうだ。この界隈は広く幕府の軍用馬の放牧場であったそうで、その名残りが 50mほど森の中に残っているのだという。馬が近隣の畑地に紛れ込まないよう防ぐ目的 のためのもので…松戸市は知っているのかどうか…貴重なものでしょう。

代表の栗田さんは、基本はこれ以上はいじらない、現状を維持していくことで十分とお考えのようです。

たしかに十分にステキな森と感じさせてくれました。

代表の栗田さん

私たちが訪問した数日後には、近所の保育園の子ども達 40 人ほどを招待しているそうです。栗田さんは「非日常性を味わってもらいたいと思っている。 子ども達が森にきたら・・・森にはトトロがいるかもしれないね、だから森にご挨拶をしようね、と言うつもりだ」とおっしゃる。

子ども達はきっと…ワクワクしながら森の中に入っていったことでしょうね。

オープンフォレスト森めぐりツアー報告
「幸谷コースは雨天につき…」

川上 将夫

5 月 15 日に予定されていたオープンフォレスト森めぐりツアー「関さんの森・溜ノ上の森」ですが、雨のため残念ながらツアーは中止の案内をしました。 しかし新松戸駅には雨にもかかわらず 23 名の方が集まりました。そのため「様子を見ながらできる範囲で案内をする」事を了解していただき、ミニツアーを実施しました。

最初の訪問地幸谷観音を経て関さんの森へ向かいましたが、だんだん雨足が強くなったため、到着後すぐに関さんの自宅庭にある森のサロンに皆さんをご案内しました。

そこでは土地所有者である関さんの挨拶や森を守る思いなどをまずお話いただき、その後パネルを使って森の概要、いろいろな生き物たち、イベント、古文書などを、スタッフより説明しました。

森のサロンにて

サロンでの話を終えた後は、関さんの庭をご案内。ジャングルの様なうっそうたる緑に覆われた庭に、皆さんびっくりされていました。

関さんの庭

溜ノ上の森

その後一行は溜ノ上の森へ。溜ノ上レディーズの皆さんが丹精こめて作った森のやわらかい散策路を、雨音を聞きながらゆっくり一周しました。

解散時に、「関さんの森の屋敷林・溜ノ上とも、私有地ではありますがいつでも訪問することができます。どうぞ天気のよい日にまたぜひおいでください」とご案内し、ツアーを終えました。

雨で制約を受けたことは残念ですが、関さんからいろいろお話をしていただく時間も取れましたので、参加者の皆さんとっては意義のあるツアーになったことと思います。

松戸のみどり再発見ツアー⑰
松戸の宝・矢切の斜面林を巡る

藤田　隆

3 月 11 日（日）、朝から曇り空で冬に舞い戻ったような寒さに身体が自然と縮こまるお天気となったが、北総線矢切駅には参加者が 50 名集まった。駅前広場から国道松戸市川線を横切り栗山浄水場に向かった。配水塔の竣工は昭和 12 年の 3 月で 75 年を超えている。栗山浄水場は舌状台地に立地し、西側は急峻な斜面に落ち込み、江戸川へと続く。金町から見るとグリーンのベルトが市川から松戸と続き、豊かな緑を印象付けている。栗山から矢切にかけての斜面林は特別緑地保全地区に指定され、住宅地などの開発がむやみにできなくなった。

林の中はゴミの散乱が著しい。これでも昨年よりは不法投棄が少なくなったという。細い坂道を降り本久寺で小休止を取る。見上げると相当の急斜面だ。本久寺前から北総線をくぐった先で野菊のこみちを坂川に向かって歩いた。坂川からの斜面林の遠景を楽しんだ後、再び斜面際に戻った。

矢切の斜面林が切れた所にある坂道「大坂」を上がると、

野菊の墓文学碑から矢切古道に戻り、矢切特別緑地保全地区（約 0.8ha）を歩く。この保全地区は平成 23 年の 3 月に指定を受け、給水塔のある栗山地区約 2.0ha は平成 20 年 3 月に緑地管理協定区域の指定を受けた。残りの斜面林約 2.2ha は平成 24 年度以降、緑地保全地区の指定に向けた計画が進行している。

外環道路から松戸市川道路に戻り、矢切サポートセンターを目指した。昼食後の「ふりかえり」では、「みどりの少なくなった現状を市民はどう受け止めればよいのか」、「一般市民とボランティア活動をする人のあいだにある溝が問題」と参加者から問題提起。樹林地については「斜面林も少なくなっているのではないか」、「樹林の手入れが遅れているのが目立った」、「一年前に比べ投棄されるゴミの量が減った」などの感想が聞かれた。事務局から「地元への愛着が感じられる。動いてくれそうな雰囲気」、「クリーンアップとシャクナゲ鑑賞の企画」と期待感や企画提案があった。

「みどりと花のまちづくり」研究・活動報告会を聞いて
森の維持管理活動と住民の意識改革

藤田　隆

3 月 11 日（日）千葉大学園芸学部キャンパスにある戸定ヶ丘ホールで「みどりと花のまちづくり」研究・活動報告会が行われた。

千葉大学大学院園芸学研究科からは「『秋山の森』を拠点とし、市民が集い森の魅力を楽しむプラン」と「松戸市の鳥類分布状況から考えるみどり計画」について研究発表があった。市民団体や行政等から、「戸定ヶ丘緑の回廊をつなぐ」（松戸まちづくり交流室テント小屋）、「今年度オープンフォレスト開催について」（オープンフォレスト事務局）、「松戸みどりと花の基金の活動について」（松戸みどりと花の基金）、「松戸花壇づくりネットワークの今年度の活動について」（松戸花壇づくりネットワーク）、「常盤平さくら通りの管理・保全について」（松戸市みどりと花の課）の活動報告があった。

その中の**「秋山の森の魅力づくりプラン」**では「秋山の森」を舞台に 3 つのテーマが報告された。

1 つ目は、森林教室のプラン。竹、樹木の伐採、下草刈りの体験、木工クラフト、竹炭作りなど、樹木を使った生活体験をする。

2 つ目は、地域との交流をテーマに「一緒に作って食べる」がテーマとなった。秋山地区の戦後の歴史を振り返り、秋山地区の持つ住居地域としての位置づけから地域交流の場にしようというプラン。竹を使った流しそうめん、タ

ケノコ料理を食すことで秋山の森の持つ地域における位置づけを明確にしていく。

3 つ目は、秋山の森を公園として活動の場所と位置づけるプラン。子どもから高齢者世代まで各世代が触れ合える機会を定期的に実施し、高齢者から親へ、親から子へ語り継ぐことのできる場の設定である。

プランでは里やまボランティアの活動に加え、管理作業体験、プレーパーク的活動、自然観察などを通して森との接触を深め、次第に住民、地域との交流を広めることにカギが握られているように思えた。

戸定ヶ丘ホールにて

森を中心に人びとが交流するようになる・・・。

維持・管理とともに、そうした森の戦略は広く描き続けなければならないテーマのようだ。

総会のご報告と新年度のご挨拶

代表：川上 将夫

皆さんこんにちは。4 月 9 日の総会で今年度の役員が決まりました。大部分の方々が再任となり、私も引き続き代表をつとめさせていただくことになりました。よろしくお願いいたします。

この 5 月に開かれた「オープンフォレスト in 松戸」では 2 千人もの方が森を訪れ、身近な森の恵みを肌で感じていただきました。市内に残された貴重な樹林を後世に残すため、私たちは、市民・行政・地権者間の協力・連携を進める役割を担いながら、これからも息の長い活動を続けてまいります。皆さんのご協力をよろしくお願いいたします。

～しぜんのコラム18～

シリアゲムシ…生きた化石

“生きた化石”とは、古い地層から出土する化石と同じ姿で現在も生きている生物のこと。学術的には“遺存種”という。魚類ではシーラカンス、昆虫ではゴキブリやムカシトンボが有名だ。

下に紹介するシリアゲムシ（ヤマトシリアゲ）は、完全変態をする昆虫類の中では原始的特徴を強く残したものとされ、古生代の二畳紀（2 億数千万年前）から見つかる化石と、今も姿がほとんど変わらない。腹部末端がクルッと反っているのが特徴。特にオスはサソリのようで、英名は scorpionfly だ。

ヤマトシリアゲ(オス)　2012.5.13 関さんの森

ヤマトシリアゲは、絶滅危惧種。千葉県のレッドリストには、カテゴリーD（一般保護生物）であるが、千葉市のレッドリストでは、カテゴリーB（重要保護生物）とランクが上がる。林縁の草地に生息するため、開発によってそのような環境が減っている都市部で、絶滅の恐れが高い。

交尾の際、オスはメスにプレゼントを与えるなど、面白い生態を持つシリアゲムシ。地味な昆虫であるが、環境を評価する指標生物でもある。注目してほしい。

(山田純稔)

★松戸のみどり　再発見ツアー⑱（緑のネットワーク・まつど主催　観察学習会 38）

「坂川からふれあい松戸川を巡る」

豊かな自然がよみがえった「坂川」とみどり茂る「ふれあい松戸川」を巡り

都会の緑と水辺のつながりを考えましょう。

７月８日（日）　９：３０～１４：３０　（千葉大園芸学部にて解散）

集合　JR 松戸駅　西口デッキ　９：30 集合　　**参加費３００円**（会員は 100 円）

持ち物　弁当、飲み物、雨具　　**その他**　小雨決行、歩きやすい服装でどうぞ

問い合せ 090－2935－9444（高橋）　　※終了後に定例会をいたします。ご参加ください。

緑ネット通信 No.37

緑のネットワーク・まつど
代表：川上将夫
年会費：1000 円
連絡先：高橋盛男 090- 2935- 9444
渋谷孝子 04-7153-5392

都市の緑を残すためには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動のテーマは、みどり特に樹林の保護･保全を願う人やグループと連携しその輪を広げ，豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

松戸の森の夏　２０１２

この夏も、子どもたちや親子連れなど、多くの方が森でステキな自然体験をしました。
森を森のまま所有している所有者さんの理解とボランティアの活動の
両方があってのことです。
松戸の森・・・小さな森だけど　なかなかやるじゃない！

5 月に開催された「オープンフォレスト in 松戸」では身近な森の素晴らしさ、大切さを、大勢の方に肌で感じていただくことができました。そしてこの夏も、7.15 流しそうめん（関さんの森）、7.23 レッツ体験（三吉の森）、8.1 虫ハカセになろう（根木内歴史公園）、8.4 レッツ体験（三吉の森）、8.4 森の楽校（囲いやまの森）、8.23「森でさがそう・みつけよう」（関さんの森）、8.24 工作づくり（根木内歴史公園）、9.1 幼稚園児の自然体験（関さんの森）、9.18 夜の虫観察会（囲いやまの森）、9.28 稲刈り体験（根木内歴史公園）、9.30 森の音楽会（囲いやまの森）・・・子どもたちなど多くの人々が森にやってきました。

ふかふかの森の地面を踏み、自然の風の中で生き物とふれあい、楽しく気持ちの良い自然体験ができたことでしょう。学校の教室で学ぶこととは別の、とっても大切な、かけがえのない「何か」を学んでくれたことと思います。

松戸の森　これからの予定・・・

・10 月 25 日～里山ボランティア入門講座・11 月 6 日「種の知恵と秘密をさがそう」（関さんの森）・11 月 11 日緑ネット・松戸のみどり再発見ツアー「森であそぼう」（囲いやまの森）・そのほか幼稚園児や小学生もいつものように訪れることでしょう。

松戸のみどり再発見ツアー⑱
坂川からふれあい松戸川を巡る

藤田　隆

７月８日午前9：30分、松戸駅西口デッキ前に39人の参加者が集合しました。駅前中通りを抜け目指した坂川広場では市民と行政が一緒になって取り組んだ坂川再生事業の説明を受けました。10数年前には自転車などのゴミが投棄され、どぶ川と化していましたが、坂川再生事業によって見事に再生し、ハグロトンボが飛ぶ姿を目の当たりにできました。全国でも珍しい方法で再生事業を行ったという解説が耳に残りました。

春雨橋、きつね橋、赤圦（あかいり）橋がかかる坂川は、両岸からケヤキ、エノキなどの樹木が枝を伸ばし、自然を取り戻した快適な河川空間で、都市河川には珍しい光景というのも頷けました。

江戸川の直前には納屋川岸跡と記された長屋門があり、川港として栄えた物流の拠点だったと説明されていました。土手に上がると霧にかすんでスカイツリーこそ見えなかったものの、360 度視界を邪魔するものがないすがすがしい気分になれました。

ふれあい松戸川は江戸川河川敷に造られた人工の河川。汚濁の激しい坂川などの水を江戸川に出さないようバイパスするために造られたもので、事業からして全国的にも珍しいものです。坂川から江戸川に入る水を浄化し、ふれあい松戸川に流し、小山で坂川に戻し、市内を流れる坂川の浄化に役立てる、こうした取り組みによってＢＯＤも２程度になったようです。1995 年完成当時、草木は一本もない裸の状態、これを自然に再生するようにした結果、昆虫、野鳥、猛禽類まで生息する多自然型河川になったそうです。ヒバリが舞い踊り、オオヨシキリの大きな声が響いてました。

午後は、千葉大学園芸学部・戸定ヶ丘ホールで５月に行われたオープンフォレストのアンケート結果報告会が行われました。オープンフォレストは今年の 5 月 12 日（土）からの 9 日間、市内 14 か所の森と 21 世紀の森と広場のパークセンターで行われたイベントです。期間中、森ではクラフトや体験活動、森をめぐるツアーが行われ、参加者は 2455 人（延べ）になりました。

森めぐりツアーでは常盤平コースが 180 人を超え、9 日間通算で訪問者が 200 人を超えた森が 3 か所になるなど市民の森への関心が高まっていることがわかりました。参加者は 60 歳代の男性が 84%（ツアー）最も多く、自然、里山への興味や健康づくり、リフレッシュといった自分の健康きっかけにして参加する市民が多かったとの報告がありました。

次回開催にも９割が参加したいと希望し、年一回といわず森を公開してほしいという意見もあったそうです。

↓ふれあい松戸川にて

里やま応援団ステップアップ講座
野田市視察 に参加して

里やまV　田村敏夫

「みどりの保全と自然再生の取り組み」と題したステップアップ講座(松戸里やま応援団)が 8 月 29 日に約 30 人が参加して野田市の「中央の杜」「三ツ堀里山自然園」「江川地区ビオトープ」で行われた。

中央の杜は約4.7haの大きさでもともと野田醤油(現キッコーマン)が醤油樽の材料をつくるために育成した樹林地だったが、その後、野田市に寄贈したもので長い間にわたって野田醤油と野田市によって管理されてきた。一時期、この杜に図書館などの公共施設をつくる計画が持ちあがったものの施設より緑が大事だという市長の判断で建設計画を断念している。適度な管理と樹林地保護によって放置林でよく見られるアオキなどの常緑樹が繁茂することなく見通しのいい景観を呈し、私たちが訪れた時には約20種の植物が観察された。その中でも夏から秋に開花するヌスビトハギやフジカンゾウの薄桃色の蝶形花、キバナガンクビソウやサジガンクビソウの地味な黄色の頭状花が印象に残った。

サジガンクビソウ

三ツ堀里山自然園は約 9ha の大きさで野田市が委託した市民団体によって管理されている。市と市民団体の協議によって郷土の里山を再現する場などを目指して今から 7 年前に開設しているが、自然型にするか、公園型にするかなど異なる考え方が現在も整理されていないため整備はまだ途中で特徴を感じられなかった。

江川ビオトープは約 90ha の大きさで利根運河に接続する江川排水路が中央を流れその両岸に沿って水田、湿生地、小水路などが位置し、さらにサシバなどの猛禽類が繁殖する樹林地に移行している。現在は水稲生産、市民農園、ビオトープ、小学生の稲作体験が行われており、将来的にはコウノトリの飼育、放鳥も重要な事業になるようだ。管理事務所での保全に至る説明では筑波エクスプレス計画に伴う江川地区の開発計画とバブル崩壊による開発業者の倒産状態、土地の投げ売りによる乱開発を防止し全域を保全するため野田市が採ってきた幾つかの自然保護条例などが紹介された。こうした結果、サシバ、オオタカ、カエル、ホタルなど多くの動植物が棲み着くようになったという。

その後、ビオトープを管理する野田市自然共生ファーム職員(第三セクターで市長が社長)の案内で主に低地部を見て回った。水田地帯では帰化植物のヒレタゴボウやクサネムの繁殖が著しく、除草が全く追い付いていないようだ。自然環境を優先した農業を標榜し田植え、除草、稲刈りは手作業で行っているという説明があったが、素人目にも収量は相当に低いことが分かる状態だった。それでも稲穂は黄色く垂れ下がり収穫の間もないことを教えている。

樹林地ではヒグラシとミンミンゼミが鳴きその声がビオトープにこだましているもののそのほかに動物の気配が感じられない。日が最も高くなる夏の午後、動物の多くが暑さを避け木の枝や葉の裏、また土の中に身を隠しているようだった。

ヒレタゴボウ群落

関さんの森
「道路の開通について…」

関さんの森を育む会　武笠紀子

都市計画決定から半世紀、新設市道が9月28日に開通いたしました。

これまで関さんの森を育む会では、幸谷の里山「関さんの森」をひとつの塊として将来にわたって遺すと共に、豊かな緑に囲まれた道作りを目指し、松戸市といろいろな話し合いを続けてまいりました。

この活動により次のようなことが実現しました。

①道路は関さんの屋敷を迂回し、松戸の原風景である江戸時代の門・蔵などが現状のまま保存

②緑の環境になじむ道路とするため、電柱やガードパイプの色・素材に配慮。また道路に潤いを持たせるため、歩道沿いの植樹帯にツルの苗木を植樹

③残された森が現状のまま残るよう、松戸市と協議を継続

ながい道のりでしたが、皆様のご支援のおかげでここまでこられました。本当にありがとうございました。

しかし一方、梅林の大量の木の伐採、グラウンドなどの土地の提供、そして森の分断など、大きな犠牲も支払いました。

何より一番心配なことは、車の通っていなかった場所に、突然１日に１万台以上の車が通ることによる環境への影響です。騒音、振動、排気ガス、環境の変化が、人間はもとより残された森の生物に悪影響を与えるのではないか。

このように心配の種はつきませんが、私達はこれからも「関さんの森」が、子どもたちや市民の遊び・学び・憩いの場として愛され、保存・維持されるよう活動を続けてまいります。

今のまま保存される関さんの庭と蔵

緑のネットワーク情報

今年も始まります！　里やまボランティア入門講座

毎年秋に開催される全5日の「里やまボランティア入門講座」。松戸の緑を守り育てる仲間づくりを続けてきたこの講座も、早 10 年目を迎えました。

10 月 25 日（木）を皮切りに、毎週木曜日に開講されます。10 月1日の「広報まつど」に募集要項が掲載されましたが、今年は応募状況が鈍いようです。受講を希望される方は、受付窓口になっているみどりと花の課（047-366-7378）にお問い合わせください。　（高橋）

緑推進委員会　第7期は街区公園の再生！

松戸市緑推進委員会は、松戸の緑の保全、育成、利用について協議する市長の諮問機関です。今年7月、第7期の委員会がスタートしました。今期の委員会は、公園緑地課が取り組む「街区公園の再生に向けたガイドラインづくり」への関与と、先年答申した「21 世紀の森と広場の魅力アップ」がテーマになりそうです（2012 年 10 月委員会段階）。　（高橋）

～しぜんのコラム19～

アカボシゴマダラを確認

8 月 10 日のこと。21 世紀の森と広場の野草園の一角で、カメラマンが集まって何かを撮影している。近よってみると、それはアカボシゴマダラであった。

アカボシゴマダラは、日本では奄美大島周辺に生息するチョウで、関東地方には分布しない。現在関東地方で見られるアカボシゴマダラは、その外見上の特徴から、奄美大島周辺に生息するものとは別亜種で、中国大陸産のものらしい。どうやら昆虫マニアによる“ゲリラ放蝶”の可能性が高いようだ。

要するに、関東地方のアカボシゴマダラは外来種。そして、食草がエノキであることから、日本固有のゴマダラチョウやオオムラサキと競合する。このことから環境省もアカボシゴマダラを『要注意外来生物リスト』に指定している。

アカボシゴマダラ　2012.8.10　21 世紀の森と広場(野草園)

8 月 26 日、21 世紀の森と広場での自然観察会にて、アカボシゴマダラの幼虫を確認した。来年は、目撃の機会が増えるに違いない。美しいチョウゆえ、歓迎するマニアがいる中、積極的に捕獲して排除すべきか、捕獲することにどれだけ意味があるのか、そのまま放置していいのか、悩ましい問題である。

（山田純稔）

★松戸のみどり　再発見ツアー⑲（緑のネットワーク・まつど主催　観察学習会 39）

「森であそぼう」　わくわく里やま活動ミニ体験

ボランティアが活動する森で　自然観察や森の手入れ体験など、
秋の一日をゆっくり過ごしませんか？　（囲いやまの森とその周辺）

１１月１１日（日）　９：３０～１４：００　（現地解散）

集合　新京成線　常盤平駅改札口　９：30 集合　　**参加費３００円**（会員は 100 円）

持ち物　弁当、飲み物、雨具　　**その他**　雨天中止、汚れてもよい服装でおいでください

問い合せ 090－2935－9444（高橋）　　※終了後に定例会をいたします。ご参加ください。